

伝説・芸能



長松山永代寺（薬師）

やくし

さか

むかし、むかし、千年以上も前のいと、今の尾平町の四日市商業高校があるあたりに、永代寺と呼ばれる七堂伽藍があつたそうです。

このお寺は、奈良時代に行基といつ立派なお坊様が建立されたと言い伝えられています。その頃の永代寺は、毎日毎日、土地の人をはじめ、あちこちからのお参りの衆で大変にぎわつていたということです。

お堂の中には、何体もの仏様があ祀りされていて、いつも慈悲深く優しいお顔で、お参りに訪れる人々の悩みや苦しみを黙つて聞いてあげてあられたそうですね。





また永代寺には、赤ちゃんを産んでもお乳が出なくて困っているお母さんにお乳を授けて貢さるという大変慈悲深いお薬師さまがあられたそうです。当時の古い書物に「母乳の靈験あらたかにして、往時は参拝の人 盛んなり」と記されています。各地からお乳を授けていただきうと大勢の人があ薬師様を訪れたのでしよう。ところが永禄十一年（一五六九）、伊勢の国隣国、尾張の國の大将、織田信長が北伊勢平定の野望を抱き伊勢の国に攻め込み、永代寺にまで火をかけ、お堂をことごとく焼き払つてしまつたそうです。

戦乱があざまり、地元の人々の手によって再びお堂が建てられると、お薬師さまをお祀りして、村人の心の中に安らぎを取り戻すことがで

きたようでした。その後も薬師信仰はずっと続けられていきました。

今も四日市商業高校の東南の崖下に、平成四年、地元の人々の協力によつて立て替えられた新しい薬師堂が木々の縁につつまれ、ひつそりと息をつめるよ^ウとして建つています。

堂内には石仏の薬師如来を中心^にに左右に日光菩薩・月光菩薩、脇壇に十二神将がお祀りされています。薬師さまは、この先も永く人々の心の中に灯をともし、住民の暮らしを見守り続けてくださることでしょう。

夜泣き石

むかし、むかし、今からおよそ五百五十年近くも昔のいじじや、尾平村に多田さんとい
う大庄屋があつたそつな。

多田家は津の藤堂藩の大庄屋を勤める家柄で、尾平村一帯を治めてあられたんだと。そ
のところの村には何軒かの庄屋があつたが、その元締めのような役職にあつて、遠
いお城におられる殿様に代わって村を治めるのが大庄屋の仕事やつたということじや。

大庄屋の家には、年に一、二度の殿様のお成りがあつて、主人は殿様との謁見(えつけん)が許され
ていたそや。そやから大庄屋といえば村一番の高い身分やつたといつことじやろう。

ところが多田の大庄屋さんのご主人は決して自分の身分や地位を誇り高ぶる御人(ごじん)ではな
かつたそつな。自ら田を耕し、草を抜き、よう働きなさつたとか…そやから村人達は大庄
屋さんをたいそう尊敬していたといつことじや。

大庄屋さんの広いお屋敷には、いろいろな花木が植えられとつて、梅・桜・桃などが春
ともなると一斉に花を咲かせて、百花繚乱(ひゃくかりょうらん)の様は、言葉なんぞでは表わせん程の美しさ

じやつたんだと。また、庭に植えられた、みかん・柿・梨なんぞの実が熟すころ、屋敷は黄金色に輝き、見る人の食欲をそそりあにはおられんそりやつたらし。

大庄屋さんのご主人は、この庭を「よなく愛し、「日成園」と名づけておられたそうな。

ところが、この「日成園」の一角に置かれひつた庭石が、ある夜、主人が眠つてあると枕元にきて、「薬師さんに帰りたい、薬師さんには帰りたい」と泣きながら訴えるんだと…

初めのうちは「おかしな夢を見たもんや」と、おぼじ気にとめておらんかつたご主人も、毎夜のことにつに氣にかかりだし、庭に出て石を見たとたん、これはびつくり、なんと石はベタベタに濡れ、まるで泣いたように見えたんじゃ



じ。

大庄屋さん(の)主人は、早々にお寺の住職に相談されて、石を永代寺にある薬師堂に納められたんじや。石はどうしたとか、その後とんと泣かんようになつたんだと。

石はもともと薬師様にあつたものが、何かの都合で大庄屋さんの屋敷に移されたのかも知れんが、石が夜泣きをするなんぞ、今もつて不思議じゃ(う)うじや。

夜泣き石は今も尾平町の薬師堂の境内(けいだい)に、泣く(え)いともなく静かに安置されています。(の) 覧になりたい方はぜひ一度、薬師堂をおたずね下さい。

撫ぜ石

尾平町の神明神社の拝殿前に左右に鎮座する二つの石を、尾平町の人々は、「神明さんの撫ぜ石」と呼んで、身体の痛みを取り去っていただき、靈験あらたかな御神石として崇め親しんできました。

この撫ぜ石には、社に鎮座する産土大社様が納まつてあられると言われており、その撫ぜ石の脇には小さな高札こうさつが立てられていて、次のように石の謂れが記されています。

それによると、『二つの石のうち、東側に安置されている石は首から上、西側の石は首から下に効用があると言われています。いざれかに痛み、痺れなどがあり、困り悩んでいる人は清水で手を洗い、口を漱い



で、身と心を清めた後、その痛みのある部位を訴え、石を撫ぜながら、神様に「どうぞ治してください。」と、お願いすれば、神様はたちどころに願いをお聞きとじけてくださいます。』と、記されています。

この高札に記されているとおり、地元の人々の間では大変^ひ利益^{りやく}のある御神石だと信じられ、お願いをする人が後を絶ちません。

古来^{こらい}より現在に至るまで各地方でも石にまつわる話をよく耳にしますし、また若い女性たちの間でも誕生石を指輪やペンダントなどに用いて幸福を願つたり、最近流行している風水などでも石の秘めたる力がとりざたされて、石のブームを巻き起こしています。

こうした石に対する人々の強い思いなどから考え方をさせてみると、やはり石には科学や人間の常識などでは計り知れない強いエネルギーのようなものが秘められているのではなかろうかとも思われます。人々が石に願いをかける気持ちもつなづけるものがあります。

人と自然の一体化のなせる中で、神明さんの撫ぜ石^{いと}がいつの頃から御神石としてあがめられ、祈りの対象になつたのか正確なことはわかりませんが、土地の神社の世話役の話によりますと、神明神社の先々代の神主さんが何かの意図^{いと}でどうからか石をもりい受けて

境内に奉^{けいほう}つたのが起源とのことです。

いずれにせよ、靈力を放ち、人々の身体より痛みをぬぐい去り、苦しみから救つてくれくわなる御神石は尾平町の住民に授かった幸せの石として、末永く大切に護つていかなければいけないのではと思います。

和泉式部化粧の水

和泉の守 橋 道貞の妻、式部は今日も鏡に映る自分の顔を眺めながら「ああ、いやいや、いやいや、何と疎ましいこの痣じや、何とかして消えないものかのう。」と、鼻のそばにある真っ黒い痣にため息をつきながら深く思い悩んでいました。

式部は、ある日思い余つて、清水寺の大悲尊に願をかけることにしました。その頃、人々の間では、清水寺の大悲尊にお参りをすれば願いごとがかなえられるという大悲尊信仰がはやつていたのです。

清水寺に詣でた式部は、「どうぞみ仏のお慈悲をもって、この痣をあとり下さい。」と一心に祈りました。すると、式部が祈願を始めて七日目の夜のことです。不思議なことに清水寺の大悲尊が式部の夢枕に現れて、「式部よ、よく聞くがよい。そなたの前世は北勢（三重）吉田郷松井の里（現在の四日市市大井手町）の神主、藤沢采女の飼つていた雌の黒牛である。一時、東光山観音寺建立の土木を請け負つたという因縁で官女に生まれ変わったものの、未だ、その業が尽きず顔に牛毛の黒痣があるのじや。その痣を消すために

は、東光山に昔の因縁を頼り、東光山觀音寺の十一面觀音の深く厚いお慈悲を仰ぐがよい。それよりそこに湧き出づる甘泉洞に浴すれば、きっと仏の感応がある事だらう。」このお告げを残し大悲尊は式部の夢の中から消え去られました。「ああ、有り難い」とじや、大悲尊のお告げがあった。」

式部は天にも昇る思いで、早々に旅支度を整えると、供の者を従えて、喜び勇んで東光山觀音寺に向かつて旅立ちました。式部十八歳の春のことでした。

式部が前世に飼われていたといふ、吉田郷松井の里の藤沢主水を訪ねて、そこに逗留を頼み、藤沢のもとより、東光山に七日間参籠し、一面觀音に心から祈りを捧げ続けました。



寺内には、清水寺の大悲尊のお告げ通りの甘泉洞があつて、美しい水がじんじんと湧き出てありました。

式部はさつそく大悲尊のお告げに従い、水をすくつて顔を洗うと、なんと不思議、泉の澄んだ水面に、輝くばかりに美しい女人の顔じよほんが映つていました。永年悩み続けてきたあの醜い痣は跡形もなく消え去つていったのです。

その後、うわさはたちまちのうちに世間に広まり、人々はいつの頃からか、この泉を「和泉式部化粧の水」と呼ぶようになりました。

翡翠谷ものがたり

むかし、むかし、その昔、今の大日山だいにちやまのある小高い丘おかの上うえに、伊勢平氏いせひらしの一族じつじゃといわれる若菜十郎永貞わかなじょうという武将ぶしょうが、高角城たかつのじょうを構えていたそな。

若菜一族は、伊勢平氏の中でもかなり強い勢力を持つ武将といわれておつた。若菜の高角城から少し東の方に東光山觀音寺とうこうざんかんのんじという寺があつて、その寺にそれはそれはみみぐとな「翡翠の玉ひすいのたま」が奉まつられていたらしい。

若菜十郎永貞は東光山觀音寺に奉られていくという「翡翠の玉ひすいのたま」を何とかして我が物にできないものかと常日頃つねひごろから考かんえておつたそな。

さあて、東光山觀音寺に奉られておつたという翡翠



翠の玉かんざしとは、いつたいどんなお宝やつたかて？詳しいことはようわからんが、何でも、一条天皇の御世の頃に、天皇のお妃に仕えていた女官でな、才智にだけた、たいそう美しい和泉式部といわれる方があられたそうじやが、あしことに美しい顔の鼻の脇にうしの黒痣ができるあつたそつな。

式部は痣のことをたいそう悩んで、日夜仏様に「どうぞ、この醜い痣をおとりください。」とお祈りしてあられたそうじや。するとある夜、式部の夢の中に仏様のお告げがあつて、そのお告げどおりに東光山觀音寺の甘泉洞の水で顔を洗つたとたん、これは不思議、痣はたちどころに消え、式部は輝くばかりの美しい顔に生まれ変わったということや。

美しい生まれ変わった式部の顔をさらになられた一条天皇は、ことのほかお喜びになられて、唐の玄宗皇帝から贈られたところ「翡翠の玉かんざし」を式部につかわされだんだとさ。

式部は天皇から翡翠の玉かんざしを賜つたものの、凡人の自分などの持ち物ではないことを悟り、靈宝の靈力を恐れて東光山觀音寺の仏の御前に奉納したということや。

ところが、若菜十郎永貞は靈力を持つ宝玉とも知らず、ある日、とうとうまんできな

くなつて、東光山觀音寺に火をかけて寺を焼き、「翡翠の玉かんざし」を奪い取つてしまふたんだとさ。

すねどじうしたじとじや、たちまち、若菜十郎永貞の奥方が気が狂うてしまつわ、自分も重い病の床につくやうで、さすがの若菜も宝力ほうりきの靈力の恐ろしさを悟つてか、早々に「翡翠の玉かんざし」を返し、自分の罪の許しを乞つたそな。

その後、東光山觀音寺を道隆禪師じょうりゅうぜんしというお坊様ぼうさまが中興ちゅうこうし、人の欲望をおこさせる「翡翠ひすいの玉かんざし」を北山の谷またにに埋藏まいぞうされたといふことや、埋藏されたといひ伝えられている場所を今も人々は「翡翠谷」と呼んでいるんだとさ。

やぶ地蔵

お地蔵さんにつわる伝説は、古くから日本各地に数多く残されてあります。また、子どもたちの世界の中にも、童話・童謡などを通してお地蔵さんをテーマにしたほのぼのと心あたたまる物語や楽しそうな唄などがたくさんあります。

いわばお地蔵さんは、私たち民衆の中に溶け込んだ、大変親しみ深い御仏ではなかろうかと思われます。

曾井町にも、古くから田の病に大変り利益がある靈験あらたかなお地蔵さんとして、今もなお敬われ、信仰の念を寄せられているお地蔵さんがあります。

このお地蔵さんを地元の人々は「やぶ地蔵」と呼ん



でいますが、その名の通り、東光山観音寺より少し離れた毎間でも薄暗い竹やぶの中に、
笹の間よりわざかに差し込む木漏れ日を受けて、身の丈一メートルばかりのお地蔵さんが
静かにたたずんでおられます。

永い年月風雨にさらされてきたためか、目・鼻はほとんど原形をとどめていません。何
時の頃、何の目的でここに祀られたかについて、地元曾井町にいのよつな話が伝わってお
ります。

江戸時代の末期、曾井町の東光山観音寺の近くに住む漢方医が、医者を開業するかたわ
ら、隣接している東光山観音寺の寺守も兼ねておられたそうです。

当時、東光山観音寺は慈悲深い十一面觀音の寺として名高く、その昔、和泉式部の顔の
痣が取れたという伝説がありました。さらに当寺の御仏は東西南北上下含めて十方すべて
の人々の悩みを救済してくださるという大変慈悲深い觀音さまとして広く世間に知られて
ありました。

ある日のこと、はやり日のために、漢方医のもとを訪ねてきた患者が、地蔵菩薩の功德を
説き、観音寺の境内に眼病による利益のあるというお地蔵さんをお祀りしようではないかと
相談を持ちかけたのでした。

その頃、地蔵信仰は全国的に全盛を極め、村の辻々に赤いよだれ前かけに錫杖イシヤウをついた辻地蔵辻じぞうが村人の安泰あんたいと旅行りょこうく人々の安全を護まもる仏として、祀まつられていました。

また、地蔵菩薩は釈迦しゃかの没後、無仏むぶつとなつた時代に民衆を救済するため、この世に現れた仏として、人々は深い信仰を寄せていただけに、患者の話に心を動かされた漢方医は、観音寺に縁ゆかりのある竹やぶに地蔵菩薩を祀られたのでした。

その後、誰がいつともなく、田の病に大変たいへん利益りえきがあるお地蔵さんだとうわさされ、人々の信仰を集めていったのです。

地元の人々からやぶ地蔵の名で親しまれ、信者の手で作られた赤い前かけは、信仰の灯のごとくお地蔵さんの胸にかけられています。仏前にたむけられた四季の草花に人々の心のぬくもりを感じる中、今日も薄暗い竹やぶの中で住民の幸せと安泰を見守るかのようにたたずむお地蔵様の姿が見られます。